

元 I メイトで日本企業に就職して同僚の日本人と結婚した張慧さん、タマサート大学から中央大学へ留学中のラッチャパーワンさん、ラジオ深夜便を聞いて入会し、中国、ミャンマー、ウルグアイで通算 8 年余日本語教育に携わった鈴木さん、この 3 人から日本語を学ぶ動機についてそれぞれ違った報告があった。張さんは外国語を学びその国を知りたいとの知的欲求があり、英語以外にロシア語、フランス語、日本語が選択肢にあった中、英語から一番遠い日本語を選んだ。ラッチャパーワンさんは J P o P の嵐、少年クラブ、ジャニーズなどの歌から日本語を学びたい、日本を知りたいと思った。鈴木さんが教えた中国の学生は、現地の日本企業に勤めたいからと経済的要求から。これらを中心にみんなの話が広がった。日本語を学ぶにいたる動機は多様で、I メイトと交流する時には相手ニーズに応えること、動機を入口として日本語学習の幅を広げ、日本と日本文化をより良く知り、日本を好きになってもらうことの大事さも教えられた。(第 1 グループ新井雅夫)

「“あけおめ、ことよろ”という言葉を知っていますか？」という留学生の問いかけがきっかけとなり、それまでの外国人と日本人との異文化という話から世代間の異文化へと話題が広がり意見が飛び交った。「言葉は時代と共に変化するとはいうものの“あけおめ、ことよろ”は違和感があるな□」「異なるものに接して違和感を感じ違いを認識することは、自分の先入観や固定観念を知るのに大切なのでは・・・」などなど。そして外国人と日本人、若者と年配者など鳥瞰図的にみるのではなく、個人個人を知り、異質と同質を感じるからこそ多文化共生につながるのではないか、という結論となった。(ちなみに「あけましておめでとう。ことしもよろしく」の省略形で、日本の若者の間では盛んに使われているとのこと。グループの中高年日本人は誰も知らなかった！) (第 2 グループ 上 篤)

日本語選択の動機を、参加した留学生たちの多くが就職に有利とかではなく、「サブカルチャーの魅力」と発表していたのは、難波さんにとって意外であった。大抵の日本人は同様に思うが、2006 年からタマサートへ派遣された日置さんはあちらで初めてそれを実感した。福山さん(二外で I メイトだった)にとっては、特にアニメのようなサブカルチャーは、就職や将来のキャリアにも関係があると言う。ラウイワンさん(タマサート)も家族が日本の漫画を読んでいたのが好きになった。武田さんが若いころは(40 年前?)は、漫画やアニメは子供のものという認識だったが、今では大人も楽しんでいる。森さんは日本の現在のサブカルチャーの特徴は、大人の鑑賞に堪えるものが多いという。すなわち、メッセージ性の高い作品(環境、平和、精神論など)が外国にも受け入れられる状況なのだろう。ここに日本の強みがあるのではないか。(第 3 グループ上 高子)

留学生の何芳さんは地方都市だったので語学教育は遅れていた。大学での選択は英語か日本語しかなかったのが、日本語なら殆どどの人のスタートが同じだと思い選んだ。言語を学ぶうちに日本人の心、社会、国民性がわかると思った。英語を選択する人はどちらかと

いうと外向的な人。そうでない自分の性格に、日本語はあっていると。

日本人会員—日本（日本語ではない）はずでに世界の中に浸透している。科学技術のすばらしさ、日本文化、日本食、ポップカルチャー、日本人のサービスなど、すでにアジア浸透しているから、日本語を選択するのは特に不思議なことではない。自分たちが若い頃は、英語を学ぶのに抵抗がなかった。それと同じ現象ではないか。

何さん—コミュニケーションの難しさ、日本での戸惑い。日本人の相づちや相手を理解しようと思う気持ちが、中国人としてはかえってその人と距離を感じてしまう。

日本人—日本人は昔から人の話を聞くよう育てられている。和を大切にするという国民性があるからではないか。最近はディベート教育をしているらしいが、昔はまったくなかった。日本人は人の意見に反論できないところがあり、グループの中にいるとき、違う意見を言うのに勇気がいる。あいまいな表現で断定的に言わない。外国人から見ればわかりにくいかもしれない。Iメイトとメールで交流しているときにはもどかしい思いがしたが、一度あったら本当に通じ合えた。メールだけの交流は限界があるのではないか。（第4グループ奥山寿子）

留学生は清華大卒で現在一橋大学の大学院生、**耿立平**さんと、ハノイ貿易大卒東京外語大の留学生で、4月から一ツ橋大大大学院生の**ブイ・テイ・ドウイ・ハン**さんの2人。日本語選択の動機がポップカルチャーと言う人が多い中、驚いたことに、この2人は「日本の伝統文化」に魅かれたことだった。ハンさんは「日本人は原爆を投下されたのに、それに負けない強い精神の持ち主だということに魅力を感じた。加えて、生け花、茶道に興味を持ったから」。耿さんは「日本は中国にとって隣国で大事な国なので選んだ。私は『一休さん』に興味を持った。もっと日本の伝統文化を学びたい」。Iメイト会員は皆、2人の姿勢に感心していました。（第5グループ園木宏志）

このグループには留学生がいなかったのでIメイト交流について、楽しみ、苦労した経験など意見交換をした。参加者にはもう長くIメイト交流して経験の長い方、最近始めた方、これから始めようかと考えている方がいて楽しく会話が進んだ。以下要約。

- ・日本語を添削して教育すると言うよりも文化的な交流を進めると意識すれば交流が楽しくなる。
- ・長く交流していると上手く行かないこともある。その時は無理しても長く続かない。いろいろな付き合いがあるのではないか。
- ・家に来たりして家族的な付き合いで交流をすることもあるが、事情でこのような交流が出来ない場合でも楽しい交流はいろいろある。
- ・交流は **give and take** で中国語を教えてもらうのが楽しみになっている。
- ・いろいろと新しい発見が交流で見つかる。
- ・誤解も時々あるがそれも楽しい。交流は楽しいことばかり。
- ・卒業後も続くことは楽しい。
- ・ツイッターでのつぶやきを学生さんが楽しんでいられるとそれそれを張り付けてきたことがあったが、無視した。アジ風はツイッターとは異なるのではないか。今後若い人はこのような方向へ向かうと思われるが、アジ風の良さを具現化する

べき。(第6グループ伊達和人)

タマサートのワリントン先生を始めとする5名の先生方と、ラジオ深夜便を聞いて入会者たちメンバー。日本語選択の動機については、第1はサブカルチャー、次に将来のキャリアに向け、経済先進国の日本から学びたい、日本の企業に就職したい。第3に欧米系の語学とは異なる日本語を学びたい。第4に日本の伝統文化に魅せられてといったものなど。先生方は授業の中で、プロジェクトX等のTV録画を見せて日本の技術レベルを紹介したり、震災等災害時における日本人のモラルや態度等の日本人観、日本のいいところを紹介する様にしている。またIメイト交流において無理するは必要ないが、学生一人一人に興味を持ち、例えば漫画の「ワンピース」を知らなくても、それがどんな漫画なのか、時には自分達世代の漫画を紹介するというのも含め、掘り下げ交流をしていけばいい。(第7グループ中村一郎)

清華大学からフェリス女子大に留学中の馬琳さんの日本語学習の動機は「大学を選んだのは知名度で、日本語を選んだのは就職に有利だから」と明快。以下馬さんと会員の会話。卒業後の予定は一「まだ具体的には考えていません。まずは大学院に進み、その後日本語に関する仕事をしたいと漠然と考えています。」将来日本に住むことも考えているか?□「来日当初卒業後は日本に来ることも考えていましたが、半年経った今、やはり止めることにしました。」なぜ?□「やはり異文化の国に住むことは社会的ストレスが大きく、自分には向かないと思ったからです。」

「今、日本の企業は日本への留学生を日本で採用して、出身国に派遣するケースが増えています。その方が企業として早く戦力化できるからです。将来を考える参考にしてね。」

「ありがとうございます。しっかり考えます。」(第8グループ園田成和)

日本に興味を持ってもらうきっかけとして、ポップカルチャーの存在は絶大だ。が、実際に1年以上日本語学習を続けている学生が日本に更に興味を持つ内容は、文化や歴史、技術(文芸、工業)だという。日々の交流で伝えている日本特有の行事や四季折々のニュースは、学生にとって日本への更なる興味喚起を促す良いきっかけとなる、とのことだった。Iメイトとの交流の際には、無理にポップカルチャーを話題にしたりせず、彼らが日本について知りたい事を増やすことが重要だといえる。彼らの質問に答えるために自らも調べることで勉強になり、互いに日本理解が深まるようになる。手紙やメールなどのやり取りは勿論、Skype等で共通のテーマを設けて話す機会を設けると、相互理解も深まりより濃い交流ができるとのことだった。(第9グループ中村亜希子)